

※解答はすべて別紙解答欄に記入すること。

受験番号
試 ー

氏名

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権等の都合により公開いたしません

--

(山折哲雄『こころの作法』による)

問一 〓 アくオのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 A・B・C・D・Fに入る語として最も適当なものを次のアくカの中から選び、符号で答えなさい。

ア いわゆる イ さしずめ ウ たまたま エ とにかく オ にわか カ はたして

問三 Eに入る最も適当な漢字一字を、問題文中から抜き出しなさい。

問四 〓 ①に「いつまで経っても意味が通ずるといふような瞬間に恵まれることはなかった」とありますが、筆者が『阿弥陀経』の本質にわづかなながらも近づいたと思えたときはいつのことですか。最も適当なものを次のアくオの中から選び、符号で答えなさい。

ア 大学に入って、サンスクリット語を学んだとき。

イ サンスクリット語を通して、『阿弥陀経』の意味を理解したとき。

ウ 茂吉の『赤光』を手にしたとき。

エ 茂吉の『赤光』が『阿弥陀経』から採られたものであることを知ったとき。

オ 茂吉の『赤光』と『阿弥陀経』の世界との違いを理解したとき。

問五 〓 ②「不思議といえば不思議である」とありますが、この筆者の気持ちは具体的にはどのようなことですか。その説明として最も適当なものを次のアくオの中から選び、符号で答えなさい。

ア 自分の体験と茂吉の歌の世界、そして『阿弥陀経』の世界の類似性に驚かされたということ。

イ 茂吉の『赤光』の短歌の世界と、『阿弥陀経』の世界との落差にとまどっているということ。

ウ 茂吉が自分と同じく『阿弥陀経』に心惹かれていたことを知り、そのことに感動しているということ。

エ 茂吉が『阿弥陀経』から「赤光」という言葉を歌集のタイトルに選んだことがよくわかったということ。

オ 茂吉の『赤光』の短歌の世界と、『阿弥陀経』の世界とが深層心理の中でつながっていると理解できたということ。

問六 筆者は『阿弥陀経』について、最初のころは波線部のようにさまざま感じたをしています。それらに共通する感覚を表わす漢字四字の言葉を、問題文中から抜き出しなさい。

問七 問題文中の茂吉の短歌「のど赤き…」で使われている修辞技巧を次のアくオの中から選び、符号で答えなさい。

ア 縁語 イ 掛詞 ウ 序詞 エ 体言止め オ 枕詞

問八 次のアくオの中から問題文の内容に合致するものを二つ選び、符号で答えなさい。

ア 『赤光』を読むまでは、幼いころに唱えさせられた『阿弥陀経』のことをすっかり忘れていた。

イ 茂吉がどういう経緯で『阿弥陀経』に現れる「赤光」という言葉を処女歌集のタイトルにしたのかは、不明である。

ウ 筆者にとって『阿弥陀経』は、何度も読み返した唯一の本であり、またその内容を最も理解していると言える本である。

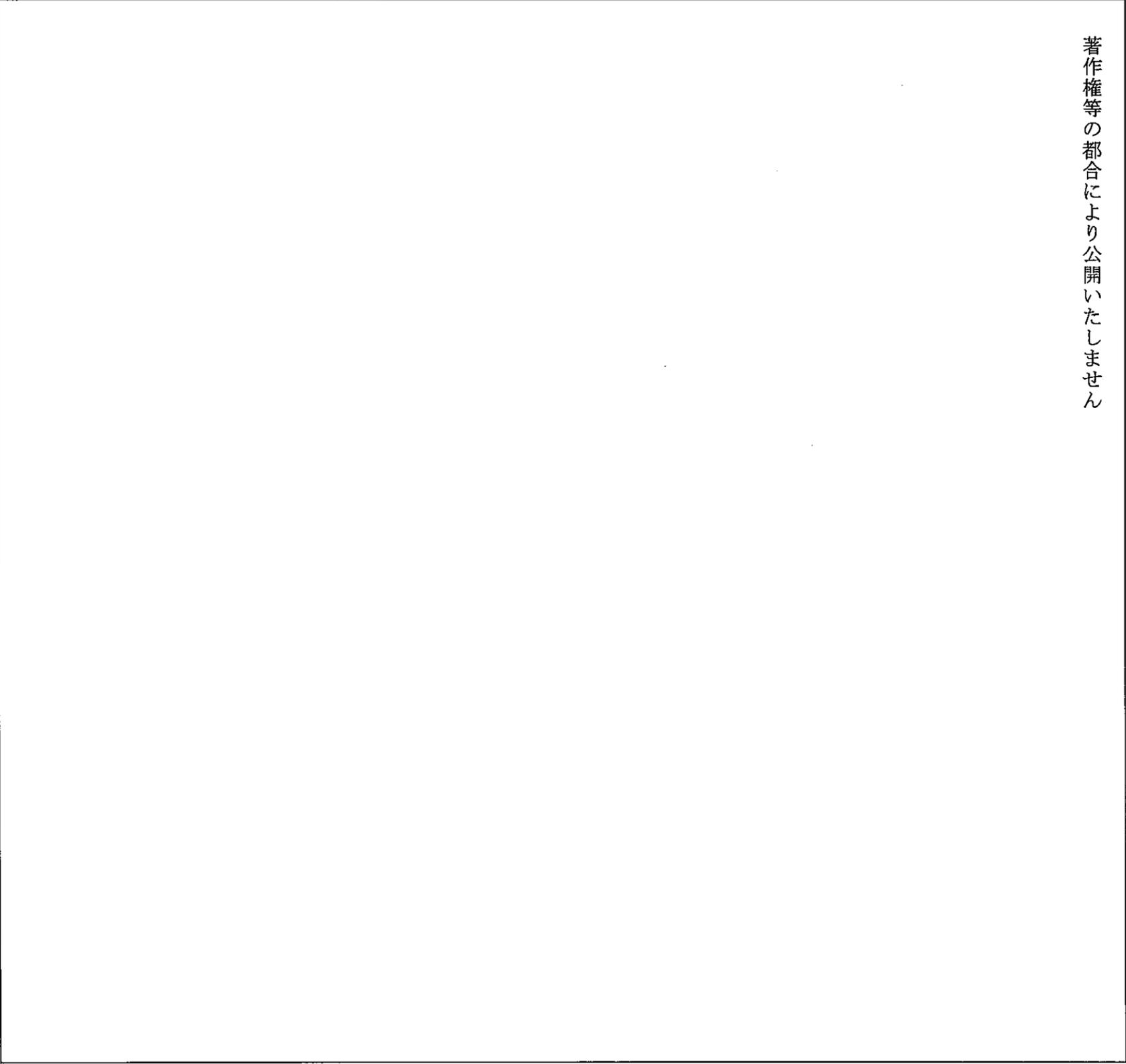
エ サンスクリット語を学び、『阿弥陀経』の意味を理解するようになったとき、筆者は『阿弥陀経』の内容に幻滅を感じた。

オ 茂吉の『赤光』を読むことによって初めて、筆者は『阿弥陀経』の本当の意味とそのすばらしさを理解することができた。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

著作権等の都合により公開いたしません

著作権等の都合により公開いたしません



問一 ㄥオについて、カタカナは漢字に直し、漢字にはひらがなで読みがなをつけなさい。

問二 A～Dに入る語として最も適当なものをそれぞれ次のア～オの中から選び、符号で答えなさい。

- | | | | |
|---|--------------|------------|------------|
| A | ア 人好きのしない | イ 口が減らない | ウ 顔向けのできない |
| エ | 融通の利かない | オ 耳を貸さない | |
| B | ア さむざむしかった | イ よわよわしかった | ウ ことごとしかった |
| エ | いたいたしかった | オ はなばなしかった | |
| C | ア 人目を盗んで | イ われしらず | ウ 堂々と |
| エ | がまんができません | オ ドキドキしながら | |
| D | ア 眼からうろこが落ちた | イ 眼から鼻へ抜けた | ウ 眼がくらんだ |
| エ | 眼が光った | オ 眼をみはった | |

(阿部到『近代日本の短編小説』所収、安岡章太郎「サアカスの馬」による)

問三——①「(まア、いいや、どうだって)と、つぶやいているような気がした」とありますが、その理由として最も適当なものを次のア～オの中から選び、符号で答えなさい。

ア 客の目につかない裏の方でつながれている馬と、教室から外に出されて一人廊下に立っている自分とが、境遇として重なるように思えたから。
イ 馬の姿からその境遇を理解することができ、さらに馬の心理までもが推測できるようになったから。
ウ 馬をひどく殴る親方の心理がよく分かり、一方馬も自らの行く末に何の希望も抱いていないように思えたから。

エ 親方が馬を殴るといふ仕打ちは、自分が担任から受けている仕打ちと酷似していて、まったく他人事ではないと思つたから。

オ サアカス団から逃げようと思つても逃げられない馬と、学校から逃げることでできない自分とが、まったく同じ境遇に思われたから。

問四——②「そうだった」とは、どういうことですか。二十字以内で答えなさい。

問五——③「僕は団長の親方が憎らしくなった」の理由として最も適当なものを次のア～オの中から選び、符号で答えなさい。

ア 団長から殴られて死にそうになり、食事すら与えられていない馬を見せものにしたから。

イ 馬が病気で死にそうになったにもかかわらず、少し歩けるようになると観客の前に引っぱり出したから。

ウ サアカス一座の花形だったところと同じように、馬が老いた今もなお観客の前で芸を披露させようとしたから。

エ ひどく痩せて、しかも背骨が凹んでいる馬を観客の前に引っぱり出して見せものにすることに反発したから。

オ 親方に抵抗もせず、最後の力を振り絞って長年きたえぬいた曲芸を披露しようとしている馬の姿に感動したから。

問六——④「思いちがい」の内容として最も適当なものを次のア～オの中から選び、符号で答えなさい。

ア 病弱で弱りきっていたはずの馬は、実際のところ非常に元気だった。

イ 痩せ衰えてみえた馬は、この一座の花形で、巧みな曲芸を披露しえた。

ウ 悪人のように思っていたサアカス一座の団長は、実は善人だった。

エ 背中に人など乗せられないと思っていた馬が、人を乗せることができた。

オ 馬本来の勇ましい活発な動作をするかと思いきや、曲に合わせてダンスした。

問七——⑤「僕の気持は明るくなった」・⑥「僕はわれにかえって一生懸命手を叩いている自分に気がついた」から読み取れる「僕」の心情の説明として最も適当なものを次のア～オの中から選び、符号で答えなさい。

ア 虐げられていたばかり思っていた馬が、巧みな曲芸を披露する姿を目の当たりにして、ひとりのファンとして心から応援してやりたくなった。

イ 馬のすばらしいダンスに感激し、楽しいひとときを過ごすことができて、自らのもやもやとした胸のうちを一時でも忘れることができた。

ウ 邪魔者でしかなかった馬が、自らの存在感を観客に示して、いつまでも一座の花形であろうとする涙ぐましい努力に声援を送りたくなった。

エ 親近感を抱いていた馬が、一座の花形として巧みな曲芸を披露するだけの力量を秘めていたことに感動し、自らの心も晴れやかになってきた。

オ 馬は、当初から自らの分身と思っていたので、活躍の場を持っていたことに大いに感動し、むしろ自らの将来に対しても自信を深めていた。

三 次のことわざ・慣用句の意味として最も適当なものを後のア～スの中から選び、符号で答えなさい。

① 青天の霹靂へきれき

② 二の足を踏む

③ 破れ鍋に綴じ蓋とがた

④ 雨後の筍たけのこ

⑤ 二束三文

⑥ 糠に釘ぬか

⑦ お茶を濁す

⑧ 狐につままれる

⑨ 雀百まで踊り忘れず

⑩ 肝胆相照らすかんたんあひあ

ア どんな者にも似合った者がいるということ。
イ 手ごたえや効き目がないこと。
ウ いい加減にその場をごまかすこと。
エ 物事を進めるのをためらうこと。
オ 幼いときの習慣は一生忘れないこと。
カ 深く心に留めて忘れないようにすること。
キ 互いに心を打ち明けて親しく交わること。
ク 突然の出来事。
ケ いろいろな物をほしがること。
コ 数が多くても値段が非常に安いこと。
サ さっぱりわけがわからないこと。
シ あきらめて途中でやめること。
ス 物事が次々に起こること。